

序章
市政の概況

一 世界と日本、そして武蔵野市

冷戦の終焉と

土屋市政時代として括る昭和五八（一九八三）年から平成一七（二〇〇五）年の二三年間をひアメリカ一人勝ち と言でいうと「変革の時代」ということが出来る。これは、世界の歴史、あるいは日本の歴史から見ても特筆すべきことである。

世界史的事件であったベルリンの壁崩壊（一九八九年）、ソビエト崩壊（一九九一年）によって、戦後の冷戦構造は終焉、アメリカによる一国世界支配が強まると、それに対抗するようにイスラム過激派による世界貿易センタービルへの自爆テロ（二〇〇一年）をはじめとする国際テロが頻発し、新たな対立構造を形成した。この対立の裏には、世界経済のグローバル化に伴う巨額な国際マネーによる富の集中と、極端な貧困という格差問題が横たわっている。

情報産業技術革命 世界グローバル経済のゲーム化をうながしたのは、人類史上、農業革命、産業革命に次ぐ三つの波 目の大革命といわれるIT（情報通信技術）革命である。昭和五八（一九八三）年、日本のパ

ソコン販売は一〇〇万台を突破。平成七（一九九五）年にインターネットが一般に普及すると、IT化の波はあつという間に市民の全生活を覆うようになった。はからずも五八年、任天堂のファミコンが登場、ゲームというバーチャル世界が子どもたちの世界を席卷した。

昭和バブルから平成不況へ、実質経済力によって国内総生産（GDP）世界ナンバー2の経済大国となった日本は、そして環境破壊 昭和六〇（一九八五）年から急激な円高と未曾有のバブル経済に呑まれた。しかし平

成四（一九九二）年のバブル崩壊以降は、不良債権を抱えた主に金融機関発の平成不況にあえぐことになる。同時に、石油化学文明による「環境破壊」という負の遺産は、地球全体を運命共同体と変え、地球温暖化、新ウィルスの伝播を含む環境劣化からの脱出を大きな課題とすることになる。

中央から地方へ

経済から環境までが地球規模で変貌していく時、その変化は国というクッションを経ずに武蔵野市という小さな行政区に直接打撃を与える時代となった。世界景気の動向は直接市の財政に反映する。世界を覆い尽くした環境破壊とIT革命は市民の意識を変え、福祉やまちづくりに影響し、教育にも抜本的改革を迫った。つまり市政の担い手は、そのまま世界の変貌に対応する舵取りをしなければならなくなった。国の対応は遅く、むしろ大きな変化には小さな行政区のほうが速やかに対応できるところから、市民に対して市政は重大な責任を持つことになる。

地球を視野

こうした状況の変化は、グローバル化する世界の動向とは全く逆の方向へ市政を向かわせることと**においた市政**なる。つまり、市民と直接向き合っている市政が、一つの完結した行政単位として市民生活の全ての局面に対応することを迫られたのである。それはあたかも市政が国政のミニチュア版となることであった。

何よりも市民の安全と幸福を追求するためには、国政に先駆けて施策を打ち出さなければならぬ。こうした市政のあり方は、戦後民主主義体制下で初めてのことであった。そのために、すでにハコモノ行政は終焉し、あらゆる局面で「ソフト行政」を市民主導のもとに展開することとなった。

荒波の只中に向かって土屋市政は漕ぎ出すことになる。

二 改革のあらし

(一) 難問解決の波

昭和五八(一九八三)年。『武蔵野市百年史』の続編となる本書は、この年から稿を起し、平成一七(二〇〇五)年までの本市の歩みを、市政を中心に記述することになる。

本市に視線を据える前に、スタートとなるこの年の内外の動きに少し触れておく。

ヨーロッパではソ連の核戦略に対抗して米国製の中距離核ミサイルを英国、西ドイツなど五か国に配備する計画に対し、広範な市民の反対運動が空前の盛り上がりを見せ、「熱い秋」と言われた。

アジアでは、亡命先から帰国したフィリピンのアキノ元上院議員が暗殺され、サハリン沖では大韓航空機がソ連軍に撃墜された。ビルマでは北朝鮮のテロとされるラングーン事件が起きる。政治的緊張が各地で高まった。

そして日本。前年就任した中曽根康弘首相が一月、韓国、米国を訪問、米国ではレーガン大統領と会い「日米は運命共同体」「日本列島は不沈空母」と語って物議を醸し、田中角栄元首相はロッキード事件で有罪判決を受けた。

四月。NHKテレビが「おしん」の放映を始め、千葉県浦安市に東京デイズニールランドが開園した。武蔵野市ではメディアが大々的に報じてきた平均四〇〇万円という市職員の高額退職金問題が市長選と重なってピークを迎える。

二期目を目指す革新系の現職に挑んだのは、保守層の支持を受けた四一歳の新人。僅か八五九票差で高額退職金問

題を正面に据えた前市議の新人が激戦を制した。五期二〇年の革新市政は幕を下ろし、土屋正忠が市長に就任する。冒頭で本書は昭和五八年から始まる、と書いたが、厳密には土屋が市長に就任した同年五月から、任期半ばで辞任する平成一七年八月までである。土屋は就任早々の高額退職金は正を手始めに、数々の難問を解決に導いていく。

就任一か月足らずで「高額退職金は正」は市長選で土屋が第一に掲げた公約である。が、簡単な話ではない。勤**退職金問題にケリ** 務条件に絡むから職員組合の同意もいる。五月二日、初登庁の日から土屋は動いた。早々に改正案の検討を関係部局に指示する。九日には骨子が固まった。翌一〇日、組合との最初の団体交渉を持ち、話し合いを申し入れる。一七日、市議会代表者会議で改正条例案を示し、同じ日、二回目の団交で組合にも提示した。約一〇〇〇万円の減額、七月一日施行などに組合は猛反発する。翌一八日、自治労働本部は市役所内に現地闘争本部を設け、二五日には二〇〇〇人集会で氣勢を上げた。翌二六日には早朝一時間の時限ストを打つ。

この間、連日団交や事務折衝、トップ会談が開かれた。大詰めを迎え、団交は三日連続深更に及んだ末、二八日未明、妥結した。まさに電光石火である。七月一日、新条例が施行された。詳細は第一章二節二に譲る。高額退職金は正は、行革の第一歩である。間髪を入れず行財政点検委員会を立ち上げるが、その後の動きは後に回す。

正面突破で実現の 難問といえ、**吉祥寺駅北口広場の整備**がある。やはり市長選の公約に掲げた。広場を含めた**吉祥寺駅北口広場** 同駅の北口開発計画が決まったのは昭和三九（一九六四）年。四一年に事業決定が下りた。以来一七年余、四本の都市計画道路は出来たが、肝心の北口広場は用地買収が難航、事業計画を三回延長してなお、手が付かない。五五〜五七年度は一件の買収も出来ず、市長が交替した五八年度は国の補助金も打ち切られていた。早速、国や都との折衝が始まる。五九年三月、四回目の事業計画延長が認められ、五九〜六一年度への変更が認可

された。未買収地は二七件残っている。同年三月の市議会の施政方針演説で市長は、「法的措置を含め、不退転の決意」で取り組む決意を語る。「法的措置」とは土地収用法の適用である。Xデーを設定した。地権者に市長の「本気」が伝わる。メンバーを一新した買収担当の用地部メンバーが地権者の自宅に日参、目覚ましい「戦果」を上げ、残り約一二七平方メートルまで漕ぎつける。六〇年三月一日、土地収用法に基づく都知事の「手続き開始の告示」が行われた。交渉はなお難航したが、翌六一年二月、強制収用に至ることなく契約が成立した。総面積約一万平方米メートルの北口広場が完成するのは翌六二年三月。市長の一期目の棹尾しんびを飾る難問解決だった。(↓第六章第二節一)

放置自転車対策に 今期、吉祥寺駅周辺が全国ワーストワンの汚名を浴びたことがある。平成三(一九九一)年思い切った財源投入 総務庁(現総務省)実施の全国主要駅の放置自転車の数である。実に四九四九台。

自転車問題を含む交通対策は、市政アンケートでも昭和五四年以来平成四年まで連続一四年、市民の望む施策の一位を占めてきた。とにかくひどかった。ご存じの風景だろうから改めて語るのはやめる。歩道は狭められ、乳母車や車いすがしばしば立ち往生した。改善は急を要する。市は五八年五月、「自転車の放置防止に関する条例」を作って「整理区域」を設けるなどしたが、効果は上がらない。ウルトラCはない。市はここで思い切った財源投入に舵かじを切り換える。大いなる決断だった。駅の近くに用地を確保し、駐輪場づくりにも全力投入した。

五八年度、約七四六五万円だった自転車対策費は、平成三年度約三億六六一八万円、四年度二二億八四七七万余円、ピークの五年度には約一七億四三二九万円に達する。その間、駐輪場はJR三駅を中心に昭和五九年度五か所、六〇年度二か所、六一年度三か所と整備され、通期では三八か所・約二万五〇〇〇台分を確保した。

JR三駅周辺の放置自転車は平成五年度の六六七四台をピークに減り始めた。一方で六年四月から交通対策課を強

化、同一二月には前記の条例を全面的に改め（七年六月施行）、放置禁止区域を設けるなどして改善の後押しをした。交通関係では、違法駐車問題の解決も喫緊の課題だった。全国初の「違法駐車防止に関する条例」を設けた。この条例で配置した交通指導員が大きな成果を上げるが、詳細は「第六章第三節三」に譲る。

行財政改革でも 行財政改革についてもひと言。昭和五八（一九八三）年七月に行財政点検委員会を立ち上げ、翌**目覚ましい成果** 年八月市長自ら推進本部長に就いて旗を振り、「中期行財政運営懇談会」（平成七年六月）「新しい

仕事のやり方委員会」（二〇年八月）「行財政改革検討委員会」（一五年一二月）と、間断なく行革に取り組んできた。高額退職金関連では、高額に至った要因の一つ、在職者調整制度を昭和五九年、わたり昇給制度を平成二年に完全廃止した。職員の数も三次にわたる適正化計画の結果、通期で一六六人減った。一四年四月には市政始まって以来の組織改革を断行した。若手中心のプロジェクトチームは通期で一〇五に及び、縦割り組織に横の風を吹きこんだ。

山歩きで培った 難問解決の幾つかを駆け足でなぞってきた。市長であれば当然だが、難問解決は土屋市長を抜き**決断力・忍耐力** には語れない。スピード・決断力・粘り腰―それらを育んだ道を、やはり駆け足で振り返る。

昭和一七（一九四二）年一月、神田で生まれた。戦時下である。縁故疎開で群馬県へ。父親は戦争で失った。母子一人一人で辛酸をなめる。小学校五年で本市に越してきた。市立第三小、同第三中を経て都立武蔵高校へ進む。三中時代から山にはまり、高校では山岳部に入った。傍ら生徒会長を務め、ラグビー部を創設する。早稲田大学ではワンダーフォーゲル部に入り、「多い年は年間一五〇日間」を山で過ごす。指導力・危機管理・人心掌握術を学んだ。

昭和四一年四月、武蔵野市役所に入るが、在職九年間、国民健康保険担当で終始する。不満だった。革新市政への幻滅と反発の日々。組合活動にも熱を入れ、執行委員も務めたが、自身の処遇を巡る問題でここでも苦汁をなめる。

ならば外から組織の改革を、と止める周囲を振り切つて五〇年、三三歳で市議選に挑み、八位で当選した。二期八年間、野党の立場で徹底して市政批判を展開した。そして五八年、四一歳で市長の座に座る。

個人の経歴にあえて踏み込んだのは他でもない、その軌跡から土屋市長の資質の数々を生んだ源が見えてくる。

土屋は初当選直後、「目指すのは日本一の市長」と語っている。そう豪語する程に、市政を熟知し、すでに理想とする都市像を思い描いていたのだろう。難問といえ、本市は長くごみ処理問題に悩んできた。前市長が解決の道を付け、土屋は果実を摘む幸運を得る。市民文化会館の建設も然り。運もまた実力の内である。時代の風も味方した。口さがない人は、財政力あつてのことと揶揄するが、カネさえあれば誰でも出来るのか、と問い返しておく。

(二) 発想の転換

前項では、今期の行政の大きな特徴として、数々の難問を解決してきたことを挙げた。行政の歩みでもう一点強調しておきたいのは、全国の自治体に先駆けて次々とユニークな施策の展開、施設の実現を果たしてきたことである。行政はしばしば住民から「お役所仕事」という批判を浴びてきた。事なかれ主義がはびこり、前例のない仕事は避けて通る。また縦割りに固執して組織横断的な課題にはあまり手を出さない。当然、それでは新しい道は開けない。殻を破ったポイントは幾つかある。常識の壁にとられなかったこと、外部の知恵に耳を傾けたことなど、つまりは発想の転換に躊躇しなかったことである。そしてもう一つ、最も肝心なことだが、前項でも触れた土屋市長の登場である。詳しくは別稿で触れるが、その成果の一端をまとめておく。

住民の声から 住民の声に応え、多くの人の知恵を借りながら、どこにもなかった施設づくりに成功した例から。

〔0123〕 昭和六二（一九八七）年八月、吉祥寺東町二丁目にあった巴幼稚園の関係者が市役所を訪れた。諸般の事情から二年半後には廃園せざるをえなくなったというのである。「幼児教育の空白地帯」になることを危惧した地元の住民から、「敷地を市が買い取って子どものためになる施設を作ってほしい」という声上がる。

市が素早く対応した。幼児教育の専門家などで構成する委員会を作って論議する中で、幼稚園にも保育園にも通えない乳幼児の存在がクローズアップされる。同時に、育児に忙殺されて孤立感に苛まれている母親の存在も浮かび上がった。そうした母子を受け入れる新しいタイプの乳幼児施設の必要性が提言される。さらに別の委員会を設けて討論を重ねた末に、平成四（一九九二）年十一月、「0123吉祥寺」が、巴幼稚園の跡地に誕生した。

子どもを預かる施設ではなく、〇〜三歳児を抱える親子が対象。乳幼児は自由に遊び、親同士は交流し、かつ相談機能や情報機能も備わっている。画期的な施設である。しかも利用料は無料。施設名はヨチヨチ歩きの乳幼児にかけるオイチ、ニ、サンから市長が命名した。一三年五月には八幡町一丁目に二館目が開館した。（↓第三章第三節三）

一通の手紙から 「私は足が悪く歩くのが大変です。吉祥寺に買い物に出かけたり、人に会ったりしたいのですが、「ムーバス」が なかなか出かけることができません。（略）市長、なんとかしてくれませんか——市内の路地を走って人気の、町内会バス、ムーバスは、吉祥寺南町に住む高齢の女性から市長宛てに来た一通の手紙だった。

市長が直ぐ反応した。交通対策課を中心に討議が始まる。外部から交通問題の専門家にも参加してもらった。足の確保は高齢者だけでなく、障害者、妊産婦、幼児連れの親にも共通する悩みである。市内に細かい網の目をかけ、バス停留所から三〇〇メートル以上離れている地域などを徹底的にあぶり出した。人口密度全国二位の本市のあちこち

に、交通過疎ともいべき地域があるのが明らかになった。そこに何とかバスを走らせることはできないか。

難問が幾つもあった。交通空白地域の道路はおおむね道幅が狭い。五〜八メートルの道をバスが走れるのか。想定する料金（一〇〇円）に市内を走る民間のバス会社が同意するのか。道幅に合った小型バスがあるのか。

警視庁や運輸省（現国土交通省）の職員にも加わってもらった委員会で討議を繰り返した。詳細は「第六章第三節一」に譲るが、課題を次々クリアして、平成七（一九九五）年一月、吉祥寺駅を起点とした一号路線が開設した。八時の始発から一八時まで一五分に一本。料金は大人も子どももワンコイン（一〇〇円）。ほぼ二〇〇メートル間隔でバス停を設けた。利用者の目線に沿った車内仕様の数々は、やはり「第六章」に詳しい。

JR三駅を起点にした路線は、その後七号線まで広がり（平成二二年現在）、市内の交通空白地域はほぼ消えた。

自然の中で学ぶ マンション住まいの親にとって、周囲を気にしての子育ては気がでない。何とか自然の中へ

セカンドスクール わが子を解き放つてやりたい。それが学習に結び付いたら―三五歳の市議会議員はそんな思いがあつて教育委員会に自然を舞台にした総合教育の検討を提案したことがあつた。行政は動かなかった。

六年後、市長になった彼は改めて、教委に学校経営検討委員会の設置を指示し、セカンドスクールの検討を促した。小中学校には昔から、夏休みを利用した臨海学校や林間学校がある。が、学校とは便宜的な用語で、実態は健康増進などが目的である。参加も強制されない。セカンドスクールは期間をもっと長くとして、正規の授業に組み入れようという構想である。関係者は戸惑つた。慣れない土地で長期間の学習活動が可能か、子どもを手離す親の不安や教師の家庭の問題はどうする、事故があつたら、経費は―理念は分かっても、立ちはだかるカベがいっぱいある。

準備は周到をきわめた。委員会を幾つも立ち上げて、一つひとつ課題をクリアしていく。実験を行い、試行を重ね、

やがて対象は小学校は五年生、中学は一年生に絞られる。教材開発委員会を設けて授業との関連性も体系化した。

平成七年（五〇一〇月）小学校が、翌八年（五〇九月）から中学校が実施に踏み切った。行き先や日程は各学校の裁量に任せた。細かい経緯は「第三章第二節一の（二）」を見ていただきたい。

地域ぐるみで 学校に関連して「あそべえ」の例も簡単に触れておく。放課後、行き場のない小学生のための「**子育てを支援 場所**」を作って、地域の大人たちが参加・支援していこうという構想である。

似たケースに学童クラブや校庭・図書室の開放がある。が、参加に条件があったり、学校単位で実施されているそれらから、**排除**される子どもも出てくる。学校の枠を取り払い、地域に住んでいる小学生なら誰でも、公立、私立に関係なく利用出来る施設が望ましい。やはり細かい論議を経て、小学校の空き教室を「居場所」に確保した。開設に向けて環境を整えていく様子は「第三章第二節一の（六）」に詳しい。公募で館長やスタッフを決めた。後者は地元住民が中心を占める。ささやかだが地域ぐるみで子どもを育てる環境が整った。子どもが中心にいる。

平成一四（二〇〇二）年一〇月、市立第三、井之頭、境南の三小学校に開設、順次市立一・二小学校に広がった。

全国の自治体が 手法の是非はともかく、トップダウンで課題を下ろし、衆知を結集して最後はトップが断を下す。**本市の後を追う** メリハリの効いた手法が豊かな発想を生かしてきた。ここでは触れなかったが、一〇〇〇万円を限度に補助金を出している高齢者の居場所「**テンミリオンハウス**」（↓第二章第二節四）なども同様である。

いずれも斬新な発想で従来の行政の目が届かなかったところに光を当てた。ついでに、施設名にもよく表れている奇抜な名称にもひと言。たとえば「0123吉祥寺」には、従来の行政の発想では考えられない部屋、「わんぱくぞうさん」（プレイホーム）「パンダのあそびば」（プレイルーム）「ひつじのおはなしかご」（図書コーナー）「なぜなぜ

くまさん」(相談室)といった名称が次々現れて楽しい。

紹介してきた施策・施設のほとんどは、平成二〇年代の時点で見ると大して珍しくなくなつた。関係省庁が評価し、他の自治体が後を追つた結果である。が、それこそ本市の施策・施設の先見性・普遍性をよく証明している。

三 国を動かす地方自治

(一) 地方からの情報発信

阪神・淡路大震災に始まり地下鉄サリンⅡオウム真理教事件などに揺れる平成七(一九九五)年四月二三日、土屋市長は四期目の当選を果たした。その三週間前の三月三〇日に中央図書館の落成式が行われている。新図書館は、七〇万冊の蔵書能力と五二〇種以上の雑誌などを一三万市民に提供する成熟したまち本市にふさわしいものであった。だが、バブル経済崩壊後の不安定な経済環境の中で、市民の要求はもう一つ、別の方向に向いて現れていた。すなわち、急速に進む高齢化への対応を求めているのである。

すでに家族崩壊は社会問題化しており、高齢化に伴う重度の要介護者を親族だけに任せることは限界にきている。ましてや、親族のいない高齢者の介護はどうするのか。国は、そうした要介護者を受け入れる施設「特別養護老人ホーム(特養)」について、定員五〇人以上、土地の広さ二八〇〇〜三〇〇〇平方メートルという規模を定めている。だが、本市のように、東西六キロ、南北三キロの狭い面積に一三万人が住む人口密度の高いまちの中に設置することは難し

かった。市では市外の複数の特養に市民枠をある程度は確保していたが、市民は市内に設置を求めていた。平成三（一九九一）年一二月、市は高齢者施設建設を目的に、吉祥寺南町四丁目に約二〇〇〇〇平方メートルの土地を取得したが、特養と在宅サービスセンターの併設は容積率の関係で無理であった。

交通の便のいい場所 それ以前に、老人ホームの市内建設に関する陳情が、昭和六一（一九八六）年一二月にも、**に特養があるまち** 平成二（一九九〇）年六月にも市議会に出され、採択された経緯がある。市の考え方は、大規模施設ではなく小規模施設で、地域住民が支え合うシステム、個々の家族では担いきれない介護を、地域が担っていく仕組みを作れないか、であった。

まちの中の高齢者施設である以上、在宅サービスセンター併設でなければならない。市長は厚生省（＝当時）を訪ね、「過疎地などに認められている定員三〇人の小規模特養を都市部においても認めてほしい」と要望した。平成四年五月、さらに平成五年七月と二年にわたった本市の要望に、同省は東京都と協議して五年末、大都市における多数の特養待機者問題の緩和と地域福祉の発展のため、定員三〇人の特養建設を認める決定を下した。これによって市内特養の第二号「ゆとりえ」が誕生することになった。ちなみに市内の特養第一号は、東京都福祉局と本市の合築で出来た「吉祥寺ナーシングホーム」（吉祥寺北町二丁目、定員五〇人、平成六年一二月完成）であり、本書の第二章第二節三に詳述している。

「ゆとりえ」は、地域密着型の全国初・都市型小規模特別養護老人ホームとして吉祥寺南町四丁目に産声を上げた。道一本で杉並区松庵二丁目と接している。吉祥寺南町高齢者施設構想検討委員会の報告を待って平成七年、住民自らが「吉祥寺南町高齢者施設懇談会」を立ち上げた。この懇談会メンバーには「南町福祉の会」の会員も加わった。「都

市型・小規模」を逆手にとつて地域に住む高齢者とその家族を皆で支える精神的支柱となる施設にしようと協力体制を組んだ。一部の人が閉鎖的な生活を送る特殊な空間ではない。地域の信頼感が支える地域福祉の核にしたい。

「ゆとりえ」という愛称は高校生のアイデアである。安らぎの場ゆとり、何かを造り出す場アトリエを組み合わせて名づけられた。利用者とボランティアが一体となつて花、音楽、アートを造り出す施設という発想だ。「ゆとりえ」は「まちの中の交通の便のいい場所に、さすが武蔵野市」と自他ともに認めるものに成長していく。

このあと幾つもの小規模特養が大都市部に誕生した。

ボランティア 「ゆとりえ」のオープンは平成八（一九九六）年七月、定員三〇人の特養、ショートステイ、デイが支える サービスセンター、在宅介護支援センターの機能を併せ持つ。地上二階地下一階、延べ床面積約一

六五〇平方メートル。敷地面積は約二〇七〇平方メートル。二階が特養（個室一二、二人部屋二、四人部屋四、サロン・食堂）、一階は開放型のダイニング・食堂・テラスである。

高齢者を介護する家族は、ゆとりえに来ることで精神的にも時間的にもゆとりができる。ここでは高齢者との生活に必要な知識も得られる。まさに情報センターだ。「ゆとりえは皆さんの広場です、ちよつとお茶を飲みに行きましょうー」こんな呼び掛けがムーブス第一号東循環（七年一月二六日運行開始）のボードにはられた。「ゆとりえのボランティア、してみない？」と、ご近所同士が声を掛け合った。その始まりは入所者へのプレゼント、ベッドカバー作りだった。洋品店から余り布を寄付してもらつと、それを小さく刻んで薄く綿を入れ、彩りよく組み合わせ縫いこんでいく。美しいパッチワークである。老人ホームだからといって病院のような白いベッドカバーでは味気ない。可愛い柄物はどう？ と少人数で始めた手仕事は口コミで広がり、市立三中の女子生徒まで大勢参加することに

なった。一針一針に思いを込めた作品に入所者は喜こんだことだろう。

植栽ボランティアも集まってきた。庭があれば春には夏の、秋には冬に向けての、一年中花を絶やさないための植え付けがある。球根類の植え付けや掘り起こし、花が咲き終わった後の木の剪定や、冬の堆肥作り……と休む間もない。ゆとりえて植栽ボランティアを始めたAさんのきっかけは、昭和六二（一九八七）年に出来た北町高齢者センターを見学した際、園芸ボランティアの姿に感動したからだという。「ゆとりえにも庭の中心に、シンボルツリーがあるといいね」と誰かが言い、たちまちハンカチツリーに決まった。小石川植物園（文京区）まで勉強に行ったりもした。ハンカチツリーは七年間一度も咲かなかったが、一五年四月に一度だけ一〇数輪の花を見せてくれた。風に舞うハンカチに似た花だった。咲いても咲かなくても、ボランティアの会は「ハンカチの木まつり」を毎年四月の四日間開催してきた。バザー、オープングーデン、ジャズコン、プチカフェ、デイサービスの作品展示などをし、その売り上げで、モジュール式の車いすをゆとりえに寄付することも出来た。

介護保険制度導入 入所者にとって特養は家庭である。職員とボランティアは家族の一員として交わっている。で**で失ったもの** イサービスの利用者も、身近な地域で安心してやすらぎを得、ボランティアは人と人との潤滑

油となってきた。

しかし、こうしたボランティアの活動も、平成一二（二〇〇〇）年から実施された介護保険制度によって徐々に変化していくことになった。

制度上、利用者は要介護度の高い人が優先となった。そのためにそれぞれに単独のケアが必要となり、これまでのような体制のボランティアでは十分対応できない状況が生まれた。それにもかかわらず、制度の原則は「自立支援」

「利用者本位」「自己決定」「チームケア」である。

さらに、介護を民間事業者に任せる合理化が、自由競争の原理で展開される。それは、これまでのような市と住民によって地域福祉を担うというシステムになじまないことが問題として指摘されている。介護保険制度導入を前に本市が国や全国の市町村長に向けて繰り返し訴えたのは、一貫して社会福祉事業の側面の高い介護の問題は、財源をも含め地方自治体に委譲すべきだということであった。本市の取り組みは第二章第二節五を読んでほしい。

(二) 市民自治が生きる

武蔵境駅の駅舎を市民の使いやすい武蔵境らしいものにして、と、連続立体交差の完成を視野に入れて「武蔵境駅舎・広場・街づくり協議会」(以下、駅場協と略)が結成されたのは、平成八(一九九六)年七月である。立体交差事業の完成は二二年一月であるから、それよりも一四年四か月前に立ち上がった市民がいたのだ。

市民が望む

その市民とは、地元の地主、商店会、老人クラブ、消防団、防犯協会、公私立幼稚園・小中学校とそ

駅舎を創る

のPTA、青少年問題協議会、亜細亜大学、日本獣医畜産大学(現日本獣医生命科学大学)の学生と

教職員など。大世帯で総勢六九人だった。

「武蔵境駅をまちのランドマークに！」の思いで結び合った駅場協のメンバーは四万一〇三四人の署名を集めて市、東京都、JR東日本、西武鉄道にまず要望書を提出する。

これだけの団体や市民が一致して行動を起こせたこと自体、一つの奇跡だといってもいい。なにしろ市が昭和五二(一九七七)年に駅前広場計画を発表した時には、「境のまちをよくする会」など地元の商業者を中心に反対運動が始

まわってしまった地域である。その結果、市の再開発計画は都市計画審議会にかけられた状態で「放置」され、六年間宿題となったままだった。そこに、五八年五月、土屋市長が登場したのである。

前述のように、吉祥寺駅北口広場計画に障害となっている未買収の土地の取得を急がなければならぬ難問が土屋にはあった。その一方で、武蔵境駅再開発に向けて、土屋はまず、反対派住民の意見を聞く姿勢を示した。「武蔵野市境・北口まちづくり市民委員会」（田村和寿委員長・委員二五人）を五九年に発足させたのである。この委員会には、JR連続立体交差事業の完成後、まちの南北は一体化することを予測して、境南町の商業者にも入ってもらった。二五人の委員に共通していたのは、「境のまちが好き」「もっといいまちにしたい」という思いだったに違いない。同委員会は一年間に一四回もの会合の中で、「再開発」に対する地域の人々の関心と理解を深める努力をし、単なる都市整備事業の域を越えた、広い意味でのまちづくりが必要であることを喚起した。

六二年四月の国鉄分割民営化を前に、六一年二月三日、土屋は正式に、国鉄と、都市計画決定の前提となる協定を結ぶ。都市計画審議会にかけてあった古い案は撤回、先の市民委員会の結論を生かした新しい案をかけた。

一〇年近く全く動かなかった武蔵境のまちづくりは、反対・賛成が一つの輪となって、ついに回転し始めたのである。「第六章第一節三」で詳述するが、JR連続立体交差事業の都市計画決定は平成六（一九九四）年五月、事業認可は七年一一月になる。この流れを見てとった八年七月の駅場協の結成（前述）は素早かった。

一〇年九月の市議会鉄道対策特別委員会に出された「武蔵境駅舎・周辺環境整備基本計画」は市と駅場協の合作である。計画には、五つの柱があった。①開放感、②水と緑、③交流、④障害のない環境、⑤防災機能である。駅舎のデザインは、といえば、まず屋根は弧を描き、壁面はガラス張り。駅南口の境南ふれあい広場公園（旧農水省食糧倉

庫跡地」と駅舎は一体になってつながっている。駅前のバス停から改札口までは雨にぬれずに行ける。福祉モデルともいえる駅舎の完成は二三年の予定である。

環境浄化は「街づくりが出来るのは、そこで生活する私たち以外にない」の太文字を掲げて創刊以来、全地域住民の手で 民約六〇〇〇世帯に配られているのが「吉祥寺東コミュニティ通信 九浦の家だより」である。昭和

五八（一九八三）年二月二八日発行の第四号には右のスローガンの下に、次の記事が目止まる。

「近鉄裏といえば成田国際空港のハイヤーの運転手も知っていなければならぬ所。外国人にも有名視されていくという…」

吉祥寺近鉄裏の環境問題の重要性を訴える文章の横には「直接請求始末記その3 原利子」の見出しが並び、次のように記されている。

「市民の風俗産業公害に関する条例（直接請求）案が、住民困窮の具体的救済を保障する対策提示も、住民への問いかけもなく突然、一月二日、環境浄化対策特別委員会が否決されたのです」

とこう綴られている背景に、吉祥寺近鉄裏のピンク街があり、市民が風俗産業の進出をストップさせようと条例制定を求めて起こした直接請求運動がある。地元の小中学校PTAが中心となったが、それを吉祥寺東コミュニティ協議会は全面的に支援したのである。

近鉄裏とは、吉祥寺本町一丁目の一部の別称（蔑称）だ。昭和五一年のストリップ劇場反対運動の過程で「武蔵野市環境浄化推進市民委員会」を生んだ。当時市議だった土屋もメンバーとして一翼を担って活動している。ストリップ劇場は阻止したが、その後もインベーダーゲーム、レンタルルーム業者が狙い、近鉄裏は「怖いまち」に。むろん、

市もピンク（街）阻止策で打って出る。近鉄東京店の東隣りに本町コミュニティセンターを設置する。街中にモニターテレビを設置する。警察の集中取り締まりを強化する…など。

だが、近鉄裏は札付きのピンクサロンの暴力的客引き、深夜騒音による被害、通学路にビニ本・大人のおもちゃ屋が並ぶという環境悪化の一途をたどり、今度はラブホテル進出ときた。

一人を超え署名を添えた「風俗産業公害に関する条例案」の要求が出されて当然であった。五七年の暮れ、藤元政信市長のときだ。

土屋は市長となった昭和五八年の九月、「環境浄化に関する基本条例」と「旅館・レンタルルーム規制条例」を議会に提出する。議会の可決をもって十一月、二つの条例が制定された。その結果、住民が直接請求した右の「風俗…条例案」は一二月、否決された。

施行された後者の条例によつて、学校や児童福祉施設、図書館などから一〇〇メートル以内の区域には、旅館・レンタルルームは許可されないことになり、ラブホテル進出を食い止めた一件は第五章第一節二に詳しい。

その後、吉祥寺図書館（昭和六二年一月竣工）が近鉄裏の環境を一変させる。第三章第四節四を読んでいただきたい。

一つだけはっきりいえることは、「市民の強い結束がなかったら、近鉄裏の環境浄化も、駅に近い吉祥寺図書館の実現も不可能だった。その中心となったのは、お母さんだった」ということ。

(三) 生活核都市の未来像は、安全快適なまちづくり

豊かさが実感できるまちとは、どんなまちだろうか。豊かさとは何だろうか。

武蔵野市の表玄関である吉祥寺駅周辺には文化・金融・飲食・ファッション・インテリアなど、おしゃれな街並みが形成されている。JR中央線と京王井の頭線の吉祥寺駅の結節点として周囲の緑豊かな住宅地に住む人々を含め、一日四〇万人の乗降客を受け入れている。吉祥寺という響き自体に商品価値を生み、「住んでみたいまちナンバーワン」などともはやされる昨今である。これを豊かさの指標とっていいか。

行政も事業者も、直接の利益よりも、このまちが継承してきた価値を、さらに高めていく努力をしてきた結果が、このまちの顔、このまちの品格となっていると思う。

真に豊かなまちづくり、と簡単にいうけれども、人権や福祉を大切に思う思想がなければ豊かさは生まれない。個人の健康や生活を支える都市環境が改良されて、社会的条件が整備されているのでなければ安全快適・真に豊かなまちづくりとはいえない。

そのためにも首長はまず、対外的な威信とでもいうべき強い意思を示すべきであろう。

安全・安心は 平成一三(二〇〇一)年は、市民の安全、安心が脅かされるということをつぶさに見せつけられる**行政の責任** 事件が多発した年であった。大阪・池田小児童殺傷事件、新宿・歌舞伎町雑居ビルの火災、そして米ニューヨークでは九・一一同時多発テロ事件が起こった。

地域社会の安全、都市環境整備のあり方を総合的な視点で、政策的に検証しなければならない。そう考えた土屋市

長は、武蔵野市生活安全条例の制定を急いだ。

平成一四年四月に、市役所の組織を大幅に変更する中で、市の防災監を防災安全課とし、防災課を防災安全課とする。さらに治安・防犯を担当する課長クラスの職を置いた。こういう組織固めをしたうえで、「武蔵野市生活安全条例」と「武蔵野市つきまとい勧誘行為の防止及び路上宣伝行為などの適正化に関する条例」を同年六月市議会に提出・可決され、一〇月からの施行となった。前者の条例に基づいて、防犯パトロール車ホワイトイーグルが小学校や保育園、高齢者福祉施設など五〇数か所の安全を点検するため、朝九時から夕方まで巡回している。後者の条例では、吉祥寺駅周辺をブルーキャップと呼ばれる指導員が徒歩で回り、新しいまちの秩序を作ることになった。豊かさの指標は安心・安全である。

一六年一〇月には市内五一地区に各一人ずつの「市民安全パトロール隊」が活動を始め、一七年四月からは「自主防犯パトロール隊」がウォーキングや犬の散歩をしながら地域の見回りを続けるようになった。

ひとにやさしい 住宅街の生活道路を走り抜ける車は極力速度を落とさなければいけない。居住者・歩行者、特に**みちづくり** 子どもたちの安全と快適性を考慮して、暗黙の秩序を徹底しなければいけない。「車優先ではなく、

人間優先の社会を！」——まちづくりの実効性を高める手段を行政は考えた。

市は平成一三（二〇〇一）年七月、「人にやさしいみちづくり検討委員会」を交通対策課内に設置した。特に交通量の多い生活道路から五路線を選び、一三年度から一五年度までに改修工事を行った。地域の特性や事情など、多様性に応える形で、キララ舗装（塗料にガラスビーズを混ぜる）、マウンドアップ（路面を五センチほど盛り上げ、段差のショックで速度を落とさせる）、自発光点滅マーク（交差点接近を知らせる）、ボラード（道端に円柱を埋め込み

道幅を狭める)などの手法を用いた。

これらの改修工事で、車の交通量と速度が落ち、成果は確実に上がっている。だが、全市的に施工する計画は、目下のところ予定がなく、人にやさしいみちづくりはモデル路線のみにとどまっている。

はらっぱは 三六〇度の大空。草の上に大の字になって伸びをするぜいたく。大人も子どもも安心して遊べる、何**むさしの**に もないはらっぱ。都立武蔵野中央公園(八幡町二丁目)である。

野草の宝庫だった。だが、その野草たちも人に踏まれて息絶え絶えになり、次々と消えていった、と嘆く人もいる。人と野草の共存は難しい、と。その論議はさておき。

このはらっぱが残されたいきさつは、第四章第一節一と資料編を読んでほしい。戦争が終わりに近づいた頃、軍需工場のあったこの地は米軍の戦略目標となって、徹底的な爆撃を受けた。つい一〇余年前にも、一トン爆弾の不発弾が、はらっぱに隣接するNITの研究棟建設現場から発見され、練馬の陸上自衛隊の手で大がかりな不発弾処理作業が無事に終わったばかり。ここは東洋一の軍需工場、中島飛行機武蔵製作所の一角だったのである。

今日もジョギングする人、散歩や体操をする人、ヨチヨチ歩きの子どもと戯れる小さいお兄ちゃんなどがある。美しい、そして豊かな人々の暮らしの一端が、このはらっぱの中で一幅の絵のように見える。

